

中3少女の平和の詩、反響呼ぶ 沖縄慰霊の日に暗唱

6月23日の「慰霊の日」の沖縄全戦没者追悼式で、沖縄県浦添（うらそえ）市立港川中学校3年相良倫子（さがらりんこ）さん（14）が読んだ平和の詩「生きる」が、今も反響を呼んでいる。

本番では6分半にわたり、原稿を見ることなく、力強い声で暗唱した。その様子が全国に放送された。

落語家の立川談四郎さんはツイッターで「胸を打たれた。これを本当の愛国心と言う」。ミュージシャンの後藤正文さんは、朝日新聞のコラムで「大人たちこそ、平和への願いを自らの言葉で発するべきだろう」と書いた。

「生きる」の全文

私は、生きている。／マンツルの熱を伝える大地を踏みしめ、／心地よい湿気を孕（はら）んだ風を全身に受け、／草の匂いを鼻孔に感じ、／遠くから聞こえてくる潮騒に耳を傾けて。

私は今、生きている。

私の生きるこの島は、／何と美しい島だろう。／青く輝く海、／岩に打ち寄せしぶきを上げて光る波、／山羊（やぎ）の嘶（いなな）き、／小川のせせらぎ、／畑に続く小道、／萌（も）え出（い）づる山の緑、／優しい三線（さんしん）の響き、／照りつける太陽の光。

私はなんと美しい島に、／生まれ育ったのだから。ありったけの私の感覚器で、感受性で、／島を感じる。心がじわりと熱くなる。

私はこの瞬間を、生きている。

この瞬間の素晴らしさが／この瞬間の愛（いと）おしさが／今と言う安らぎとなり／私の中に広がりゆく。

たまたまなく込み上げるこの気持ちを／どう表現しよう。／大切な今よ／かけがえのない今よ

私の生きる、この今よ。

七十三年前、／私の愛する島が、死の島と化したあの日。／小鳥のさえざりは、恐怖の悲鳴と変わった。／優しく響く三線は、爆撃の轟（とどろき）に消えた。／青く広がる大空は、鉄の雨に見えなくなった。／草の匂いは死臭で濁り、／光り輝いていた海の水面（みなも）は、／戦艦で埋め尽くされた。／火炎放射器から吹き出す炎、幼子の泣き声、／燃えつくされた民家、火薬の匂い。／着弾に揺れる大地。血に染まった海。／魑魅魍魎（ちみもうりょう）の如（ごと）く、姿を変えた人々。／阿鼻叫喚（あびきょうかん）の壮絶な戦の記憶。

みんな、生きていたのだ。／私と何も変わらない、／懸命に生きる命だったのだ。／彼らの人生を、それぞれの未来を。／疑うことなく、思い描いていたんだ。／家族がいて、仲間がいて、恋人がいた。／仕事があった。生きがいがあった。／日々の小さな幸せを喜んだ。手を取り合って生きてきた、私と同じ、人間だった。／それなのに。／壊されて、奪われた。／生きた時代が違う。ただ、それだけで。／無辜（むこ）の命を。あたり前に生きていた、あの日々を。

摩文仁（まぶに）の丘。眼下に広がる穏やかな海。／悲しくて、忘れることのできない、この島の全て。／私は手を強く握り、誓う。／奪われた命に想（おも）いを馳（は）せて、／心から、誓う。

私が生きている限り、／こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を、絶対に許さないことを。／もう二度と過去を未来にしないこと。／全ての人間が、国境を越え、人種を越え、宗教を越え、あらゆる利害を越えて、平和である世界を目指すこと。／生きる事、命を大切にできることを、／誰からも侵されない世界を創ること。／平和を創造する努力を、厭（いと）わないことを。

あなたも、感じるだろう。／この島の美しさを。／あなたも、知っているだろう。／この島の悲しみを。／そして、あなたも、／私と同じこの瞬間（とき）を／一緒に生きているのだ。

今を一緒に、生きているのだ。

だから、きっとわかるはずなんだ。／戦争の無意味さを。本当の平和を。／頭じゃなくて、その心で。／戦力という愚かな力を持つことで、／得られる平和など、本当は無いことを。／平和とは、あたり前に生きること。／その命を精一杯輝かせて生きることだということ。

私は、今を生きている。／みんなと一緒に。／そして、これからも生きていく。／一日一日を大切に。／平和を想って。平和を祈って。／なぜなら、未来は、／この瞬間の延長線上にあるからだ。／つまり、未来は、今なんだ。大好きな、私の島。／誇り高き、みんなの島。／そして、この島に生きる、

すべての命。／私と共に今を生きる、私の友。私の家族。

これからも、共に生きてゆこう。／この青に囲まれた美しい故郷から。／真の平和を発進しよう。／一人一人が立ち上がって、／みんな未来を歩んでいこう。

摩文仁の丘の風に吹かれ、／私の命が鳴っている。／過去と現在、未来の共鳴。／鎮魂歌よ届け。悲しみの過去に。／命よ響け。生きゆく未来に。／私は今を、生きていく。

朝日新聞 DIGITAL 7月29日より



巷論

恋する釧路湿原～湿原の風に吹かれて

釧路湿原国立公園化の連動を始めたとき、当時の許認可権を握っていた厚生省の役人は「ただ広いだけ、目立つものは何もない」とにべもない態度をとっていた。ラムサール条約指定湿地として釧路湿原が世界に認められたとき、後追いながら慌て

て「ただ広いだけ」が「広大な水平景観」。「何もない」は「わが国の原風景」だと。よく言うわ。

あれから30年、何もないといわれる湿原全域に、ノロッコ号を含めると毎年百万余りの人々が押し掛けるようになった。

80年ほど前、月刊専門誌「野鳥」に更科源蔵氏が「タンチョウ生息と釧路湿原」と発表したのが、私の知る限り釧路湿原名称の嚆矢。その後、湿原学の辻井達一氏の活動などで湿原の生物多様性が注目され、全国トップ高校の研修旅行や自然好きの若者が集まるようになってきた。

ノロッコ号に引かれる年配の観光客は、ただ茫洋と広がる水平景観に安らぎを感じ、さらに温根内木道に立ち入ってヒラヒラとまとわり付く蝶などととともに、最奥のミズゴケ湿原に達して初めてこの湿原が、ただ者ではないことを感じる。

以前木道をご一緒した方から頂いたメールで、「散策では動植物のつくり出す生態系の一部を垣間見ることができ、体と頭が活性化されました。そして煩わしい人間関係や少々行き詰まった仕事へのヒントを得た気もしました。知床や阿寒も良かったが、この湿原ほどの感動は得られませんでした。またいつか…」

ほとんどの方が、この木道をたどるうちに顔の表情が明るくなり、行き交う人と気軽にあいさつを交わしている。日本トップクラスの清浄な空気に囲まれ、パンノキやヨシ群落、足元の野草、さえぎり続ける野鳥たち。この木道一帯は生き物たちが織りなす華麗な舞台だ。

さて、28日（土）午前10時、温根内ビジターセンターから出発する本校の観察散策会。今回は「なぜ湿原で人は癒されるのだろうか」を主題に、木道をたどりながらハンノキ・ヨシとタンチョウ・食虫植物の生き様・ミズゴケと共棲する貴重な生き物たちの話題を解説させていただきます。スクールバスは定員に達しましたが、お車でも参加なさいませんか。

大西英一北海道学院釧路専門学校環境教育研究センター長、北海道マスターガイド
釧路新聞 7.25より



「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に

関する調査研究」【結果の概要】 国立青少年教育振興機構

①「家族行事」（家庭）、「友だちとの外遊び」（地域）、「委員会活動・部活動」（学校）を多くしていた人ほど、社会を生き抜く資質・能力が高い。

②「お手伝いや家族行事といった体験が多く、家族との愛情や絆を強く感じていた人」や「外遊びを多くし、遊びに熱中していた人」ほど、社会を生き抜く資質・能力が高い。

③ 親や先生、近所の人から「褒められた経験」が多かった人は、社会を生き抜く資質・能力が高い。そのうち、「厳しく叱られた経験」が多かった人はより社会を生き抜く資質・能力が高い傾向がみられる。

④「家族との愛情・絆を強く感じていた人」ほど結婚願望や子育て願望が強く、「遊びの熱中度が高かった人」ほど自己啓発やボランティア活動を行っている人が多い。

⑤ 子供の頃、家庭の教育的・経済的条件に恵まれなかった人でも、「親や近所の人に厳しく叱られた経験が少なく、褒められた経験」が多かった人、「家族でスポーツしたり自然の中で遊んだこと」や「友だちと外遊びをしたこと」が多かった人は自己肯定感が高い。

⑥ へこたれない力が高い人ほど、恋人に理由もなく突然ふられた時は「落ち込んだが、これも人生の肥やしと思った」、スポーツ競技で補欠に回ってしまった時は「監督を見返してやろうと思ひ、再び練習に打ち込んだ」など、物事を前向きにとらえ、あきらめずがんばろうとする意識が高い。